文樂の若手へ

高安吸江

此間松竹の白井會長に遇つた時、中座の夜の部で延若は堀端の忠彌一役、たゞ卅分程しか出ぬが、それでも見物は一杯來てゐますと話されました。

此れは座頭の河内家がゐなくても、若手だけで十分客は呼べるといふ意味らしく、その爲めかどうかわからぬが、文樂も來春から二部となり、二三の若手を拔擢して腕を振はせて見るそうです。

興行成績は別として、本質的には凋落の一路をたどる近來の文樂、世界に誇るべき特殊な藝術である此人形淨瑠璃も、どうやら滅亡の非運に向ふ——處でなくもうその最後の日が迫つてゐる、などいふ悲觀論者さへある位に、憂ふべき狀態になつてゐる今日、次の時代を肩負つて立つべき若手の養成が目下の急務であるのは云ふまでもありません

しかし若い人々も此點自覺して近來大分勉强し出したといふ話で、先頃から催された因協會の技藝奬勵會その他の好成績からも、それが眞實であらうと推せられます。

私もその一部分を見たが、無論未完成ではあるにしても、その意氣、その熱は驚くべき程で、有望な將來が約束せられた者も二三はあつたので嬉しかつた。

來春の企がどの範圍まで及ぼされるのか、まだ知り得ないが、とにかく新進少壯の人々を激勵して完成の域に達せしめやうとの計畫は洵に慶ぶべきことで、私は此等の選ばれた人々が先輩諸大家の教を忠實に守り、粉骨碎身、圓滿な斯道の發展に盡されるやう衷心から祈つてゐます。

たゞ注意すべきは見物に對する關係です。即ち興行成績と技藝成績とは必しも並行するものでなく、或時は却て逆比例を示す場合もあることを知らねばなりません。

大衆は正直であるとはよく云はれる言葉です。成程大衆は或點ではかなり、鋭い批評家であり得るが、また一方では單に安價な享樂者に終始することもあります。

それで演者は常に大衆に親しみ其聲を聞くのはよいがそれに對していつも批判的態度を失はず、己が彼等を誘導すべき位置にあることを決して忘れてはなりません。

尤惡いのは彼等に迎合することで、殊に大に危險に感ぜら

れるのは此頃の大入つゞきです。といふのは此頃の見物は昔に比べて大分質が變つた――うちあけて云へば下落したからです。

ひどいのになると古靴が濟んでからゾロ〳〵とやつて來るのさへ、時には見うけられました。無論此れ等は前に述べた中座の場合とは全く別です。芝居の方では歌舞伎に興味を感じ得ず、新作ものゝ理責めでないと承知が出來ぬ若い人々は延若や梅玉などの老人は喰い足らずやはり若い寶助や鶴之助等が活動すると即座に共鳴するのです。

文樂の方ではそうは行かぬ、第一新作なるものが大分問題で、此れについてはこゝでは述べぬが、芝居と違ひ新作にしても別に變つた演出や作曲があるではなく、やはり大體に於て義太夫淨瑠璃に一定した條件にはまらねばなりません。

そうした文樂では、古靴なくても若手でよいといふ法はなく、つまり唯無理解、所謂猫に小判、馬耳東風といふ格で、是等は多く何々後援會の義理見に狩出された連中、ポケットにはウイスキーの小罎を忍ばせるか、乃至は熱燗入の大魔法瓶御持參といふ手合でしやう。

或はまた義太夫に關する知識はないが、近頃名高くなつた人形淨瑠璃を見て國への土產に、などいふ人々は、人形の指が動く、頭をかくと唯未梢的な技巧のみを驚歎する。忠臣藏を見せても、淺野内匠頭や大石内藏之助と云はねば通じないのは此組です。

最後に近頃稽古を始めたとか又は十年一日の如く一向進境を見せぬ人々は我が技倆か、高々その師匠を標準として判斷するから、誰のを聞いても大低は皆名人だと感心します。

斯うした種々の見物は到底深みのある眞の藝術を理解することは六ツかしく、唯薄ッペラで表面的なもの、殊に美音――それも鍛え上げて出來たものでなく、唯出來の美聲をそのまゝ不用意に使ふから、いづれ將來は潰してしまふことが多い、その美音で語るのでなく唄ふのを喝采します。

此れには近頃多くなつた道頓堀出演も大分影響したことと思ひますが、そこではいつも道行のやうな唄ふものが演ぜられるので、其習慣が本格興行に祟り、語るのを忘れてツイ唄はうとする、低級な見物はそれを喜んで拍手する、床ではスツカリ得意になつて、愈々邪道に陷るといふ順序になるのです。

此れ等は此れから進まうとする若い人々にとつて　るべき誘惑の一部に過ぎないが、とにかく私が諸君に御願したいのは、どうか死物狂になつて諸名手の薫陶をうけ危險極まる誘惑のトーチカや鐵條網を徹底的に打破しつゝ前進また前進、終に勝利の月桂冠を戴くやう此際固く〳〵決心して其實行にとりかゝることであります。

（昭和十七年十二月）